

## 生涯にわたって 社会のいたるところで学ぶための方法序説

### 会議の学び化していますか？

松田 道雄

提案：教育に関わる関係者の会議は、会議自体を常により学習効果が高まるよう、毎回改善と工夫を重ねていきましょう！

年度末になりました。今回の筆者のテーマは、会議です。生涯学習や社会教育行政に関わる仕事をされている本誌読者の皆様にとっては、毎年度の中での重要な仕事（事業）に、生涯学習や社会教育関係者を対象とする様々な研修会議があります。研修と名づけられるように、研修会は単なる伝達会議ではなく、会議の目的に学びの様相を強く持つ会議です。そのため、会議担当者の方々は、参加者がより学習効果が高めることができるような工夫や配慮を日頃よりなされていることと存じます。特に、それらの会議を担当される方が社会教育主事の場合、多くの主事の方々は学校教育職の方々でしょうから、なおさら、学習効果についての配慮は職業がら自然に意識なされてい

しゃると思います。

今年度、筆者が参加した会議の中で、担当者が会議の学び化（参加者の学習効果を高める努力）に特に強く尽力されていると感じた会議事例を2つ、本誌読者の皆様方に紹介します。筆者は大枠だけを述べ、実際の運営で心がけたことや成果などについては、担当者から直にコメントもらいましたので、そのまま引用します。今回紹介する会議の担当者は、社会教育主事であります。2つの会議はいずれも山形県内の会議で、午前・午後の1日研修会です。

まず、1つ目の会議は、山形県教育局生涯教育・学習振興課主催で山形県青年の家が主管した、県内高校の生徒会役員および地域づくりに関心のある生徒を対象にした「地域をつくるリーダーセミナー」です。担当者は、研修課研修主査・土橋明晃さんです。土橋さんは高校の理科の先生で、現在職が4年目です。青年の家に赴任してから毎年度この会議を担当されて、工

夫改善を重ねていらつしゃいます。このセミナーは、県内の高校生が参加しやすいように、山形県の会場を2つに分けて行われました。午前は、高校生にとってやや年上でロールモデルとなり得る地域活動者による講話を行い、その後、会場周辺の商店街をフィールドワークで巡って商店主やNPO等の工夫を現地で確認し、そこで抽出した課題を午後の検討へつなげました。

昼食後は、異なる高校どうしで初対面の4人を基本にしたグループでこの時間だけの課題解決チームになり、地域課題の事例学習として、午前に足を運んだ商店街の課題への解決案を約1時間30分程度で考え合い、4コマ形式に用紙にまとめて、グループ発表会を行いました。最後に、この1日研修で学んだ成果を自分たちの学校や地域やこれからの自分にどう生かすかグループから1名ずつ発表してもらって終えました（図1）。

筆者は、午後のグループワークのファシリテーター役を担当

図1 「地域をつくるリーダーセミナー」 構図

|   |    |                 |
|---|----|-----------------|
| 1 | 午前 | 先輩青年リーダー講話      |
| 2 | 午前 | フィールドワーク（地元商店街） |
| 3 | 午後 | グループワーク         |
| 4 | 午後 | グループプレゼン・個人発表   |

しました。6年間ほど毎年度、このセミナーに参加し、担当者の毎年度の工夫改善を直に体感する機会を得ています。なお、山形県青年の家は、県内の青少年ボランティア活動の中央センターを担っており、職員（高校の先生）の方々が中学生・高校生等の多彩なボランティア活動を支援しています。

2つ目の会議は、教育委員会管轄ではなく、社会福祉協議会主催の会議です。山形県社会福祉協議会が毎年度実施しているボランティアネットワーク会議です。名称は「山形つながりあ

ったかいぎ」。担当者は、地域共生推進係主事・佐藤友佳さんです。この会議名称も佐藤さんが名づけました。佐藤さんは福祉の大学を卒業後この職場に就職し、新人1年目からこの会議担当を引き継いで3年目です。それまで県社協の会議は県社協所在地の山形市で行われてきましたが、佐藤さんが担当された年から、県内の市町村社協と連携して、福祉の現場を学び、現場で学び合うことをコンセプトに、毎年度、異なる市町村で開催するようになっていきます（その分、開催地社協との連携や準備のご苦労かかっていると思えます）。

今年度は、戸沢村社協の協力を得て、戸沢村で行われました。戸沢村は近年2度の洪水災害がある中で、地域住民が集うサロンが再開し、被災された方々にとっても心の拠り所となっている取り組みがメインの事例です。午前は、その関係者によるトークショーで経緯を具体的に学び、その後、サロンの現場を参観し

図2 「山形つながりあったかいぎ」 構図

|   |    |             |
|---|----|-------------|
| 1 | 午前 | 現地事例トークショー  |
| 2 | 午前 | 現地参加体験（サロン） |
| 3 | 午後 | グループワーク     |
| 4 | 午後 | 1人1分宣言      |

ました（戸沢村社協職員の方々の表現力、演出力に参加者みな感動でした）。

午後は、この事例から学ぶことができたこと、自分たちの地域福祉やボランティア活動の実情や課題、課題解決のアイデアなどについて、異なる職場の参加者同士が4人グループを基本にして思いや考えを掘り下げ深め合いました。途中、参加者全体での名刺交換や情報交換の場も入れながら。最後は、この会議の名物になりつつある、1人1分宣言で終わりました（図2）。

筆者は、山形県社協のボランティア

ティア・市民活動振興センターの運営委員もしているので、毎年度この会議にも参加し、午前・午後の進行役を担当しました。

さて、この2つの会議の企画実施を担当された土橋さん、佐藤さんに、それぞれ、会議の工夫改善と自身の手ごたえ・やりがいについて、コメントをもらいましたので、読者皆様に紹介します。（36～37ページ）

読者皆様が、それぞれ土橋さん、佐藤さんにこの会議についてさらに詳しくお聞きしたい場合は、山形県青年の家、山形県社会福祉協議会、それぞれHPからメールで問い合わせさせていただきます。新年度のこの2つの会議のさらなる進化も楽しみますね。

筆者はすでに60代半ばですが（気持ちだけは若いと思っています）、この連載でも筆者より若い世代の安西さん、中泉さん、佐藤さんが日々創意工夫した実践を報告なされていらっしやいます。今回紹介した、山形県の土橋さん、佐藤さんもそうです。

## 「場をつくる工夫と、若者に届いた手ごたえ」

土橋明晃（山形県青年の家 研修課 研修主査）

庄内・内陸の二会場で行った「地域をつくるリーダーセミナー」を終え、場づくりの工夫と得られた成果、そして仕事としてのやりがいを改めて実感しています。本セミナーは単なる講義ではなく、参加者自らが現場を見て考え、仲間と対話し、提案へとまとめる一日型の学びを意図しました。午前には地域活動をしている青年リーダーの話を聞く「インプット」を置き、直後に商店街を歩いて現場の課題と魅力を肌で確かめるフィールドワーク、午後は異校混合の班で短時間に課題解決案を練る「アウトプット」という流れを設計しました。この循環が、知識を情報で終わらせず「自分ごと化」させる効果を生み出しました。

運営面では、初対面でも発言しやすくするアイスブレイクや発言ルール、発表を4コマ形式にまとめるフォーマット提示などを行い、発言のハードルを下げました。商店街の店主のお話を聞く機会を丁寧に確保したことも、参加者の気づきを増やすうえで有効でした。アンケートや当日の様子からは、「現場で見聞きしたことが午後の議論に直結した」「自分にもできることが見えた」との声が多

く、学びの深まりと行動意欲の高まりを確認できました。何よりのやりがいは、短い一日の中で高校生の表情や言葉が変わり、帰り際に「やってみたい」と言う姿を見れたことです。企画・運営という形で若者の学びと一歩を支えられる実感は、公的な場づくりに携わる者にとって何にも代えがたい励みになります。今後は参加校の偏りや交通面などの課題にも取り組み、さらに多くの高校生が主体的に学び・活動できる場の実現を目指していきます。



フィールドワークで店主から解説を受ける参加者（2025年12月7日、富樫ろうそく店）



午後のグループプレゼン風景（2025年12月14日、山形県青年の家）

今回「山形つながりあったかいぎ」の企画・運営を担当いたしました山形県社会福祉協議会の佐藤友佳と申します。この「山形つながりあったかいぎ」は、以前は「ボランティアネットワーク会議」の名称を使用していましたが、近年地域の中では「ボランティア」という言葉のハードルの高さを感じるとの声や、ボランティアの推進において社会福祉協議会や教育機関、行政、地域福祉団体など多様な主体がつながり連携していく必要性が高まっていることから、「山形つながりあったかいぎ」（以下、あったかいぎ）の名称に変更しました。社会福祉協議会が推進する「福祉でまちづくり」の視点をもとに県内のボランティア支援者同士のネットワークを広げることを目的に開催しています。

このあったかいぎの特色は沢山ありますが、2つご紹介します。1つは県内各地の市町村を開催地として、その地域の社会資源や魅力ある福祉活動を参加者に体感してもらうことです。例えば市民の思いから復活を遂げた映画館や、災害により切れかけた住民同士の絆を繋ぎとめる活動を行うサロンなど地域の拠点を訪問し、参加者も一緒にみて、きいて、学ぶといった機会を作っています。

2つ目はなんといっても支援者同士がつながる場であることです。中高生を始めとする学生ボランティアや、子どもたちの健全な育成の支援という視点では、教育機関と社会福祉協議会等がつながることが大きなメリットになると考えています。そして社会福祉協議会は、地域のつながりづくりと、福祉を「我が事」として考える福祉教育など地域福祉に関する強みを持っています。それぞれの専門性や特長を持つ多機関同士が分野を超えて出会い、つながり、自身の地域をより良くしていくきっかけになるような場づくりを目指しています。

まずは担当として、参加者が地域の新たな魅力に気づき、そこでまちづくりをする人々との交流を通して心がさらに元気になり、自身の地域や業務を振り返った時にもやりがいを感じられる「明日からまた頑張ろう」と思える「あったかいぎ」を目指しています。そして県内各地であったかいぎを広げていけるように、私自身も参加者から感じたあったかい気持ちを忘れずに取り組んでいきたいと思えます。

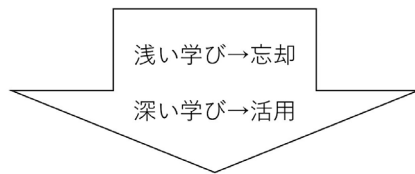
### 図3 学びの目標

- 1 現在の仕事に生かす情報を得る。
- 2 自分の職歴に生かす考え方・生き方に気づく。
- 3 仕事でつながれる人と知り合う。

### 図4 学びの誘因

- A ミラーニューロン  
学習、共感性  
「人のふり見て、我がふり直す」
- B オキシトシン（幸せホルモン）  
幸福感、自己肯定感、共感性

### 図5 学びの程度



### 図6 学びの方法

- ア) ロールモデル講話  
イ) トークショー・ロールプレイ  
ウ) グループワーク・プレゼン  
エ) フィールドワーク・現場体験  
オ) 自由交流  
カ) 全員発表  
キ) 実演・みせ出し など

### 図7 改善の視点

- 1 限られた時間にどう組み合わせる？
- 2 受講者の学びを最大化するには？
- 3 毎年度の蓄積を増やしていくには？

次の世代の方々、これまでよりもさらにによりよく改善していく姿の総体が、人間社会が発展していくということなのでしょう。参加者のさらなる学びの充実に向けて、より学びがいのある会議運営を担当者として改善工夫していくことは、何より担当者ご自身にとって、仕事（職務）を通じた生涯学習の実践そのものです。

（まつだ・みちお 皆様の「会議の学び化」応援します！）  
尚綱学院大学教授（宮城県）  
連絡先：matsuda@shokei.ac.jp

議の学び化を考えていくためのフローを図3と図7にまとめました。読者皆様が担当なされる新年度の会議のますますの学び化の充実をご期待申し上げます！  
4月号寄稿は、連続になります。松田道雄が担当します。よろしくお祈いします。

「山形つながりあったかいぎ」が大切にしていること  
— 職種を超えて生まれるつながり —

佐藤友佳（山形県社会福祉協議会地域共生推進係主事）



開催地の飲食店からの昼食を社会福祉協議会や教育機関などの職員同士が情報交換をしながら美味しくいただきました。（2025年12月19日、戸沢村中央公民館）

開催地で行われている地域福祉活動をあったかいぎ参加者全員で体感しました。2025年3月11日、鶴岡市社会福祉協議会（山形つながりあったかいぎin鶴岡）

